

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 17 日現在

機関番号：32632

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370705

研究課題名(和文) 自己決定理論を越えて - 日本人大学生EFL学習者の動機づけ理論とその応用 -

研究課題名(英文) Investigating L2 Learning Motivation of Japanese University Students:
Self-determination Theory and its Applications

研究代表者

阿川 敏恵 (Agawa, Toshie)

清泉女子大学・付置研究所・准教授

研究者番号：90409805

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究ではまず、構造方程式モデリング(SEM)を用いてSDTの検証をおこなった。Agawa & Takeuchi (2016)の研究に質的アプローチを加えた。具体的には、日本の大学で英語を学習する大学生に面接調査を実施し、心的欲求と動機づけの因果関係を深く掘り下げて検討した。この結果に基づき、日本人大学生英語学習者の動機づけを測定する質問紙を開発し、質問紙の妥当性、信頼性の検討をおこなった。最後に、SDTに基づいて日本人大学生英語学習者の動機づけを高めるための教育的介入を実施した。介入の効果を開発した質問紙で測定し、その結果を報告した。

研究成果の概要(英文)：This research project, based on SDT, achieved three major goals. First, it used an interview study to investigate Agawa and Takeuchi's (2016) results further, which quantitatively examined the validity evidence of SDT in the Japanese EFL context. Second, based on the interview study, a new questionnaire was developed to measure Japanese university students' L2 motivation. Some evidence of the new instrument's validity and reliability was presented. Third, a pedagogical intervention based on SDT was implemented in an EFL course at a Japanese university, and its effectiveness was measured using the newly developed questionnaire. The results of this project show that (a) SDT is applicable in the Japanese EFL setting, (b) pedagogical interventions based on SDT are effective for improving Japanese university learners' L2 motivation, and (c) the newly developed questionnaire is sensitive to measuring changes in Japanese university learners' L2 motivation.

研究分野：外国語学習者の動機づけ

キーワード：L2 動機づけ 自己決定理論 教育的介入 SEM 面接調査 質問紙調査

1. 研究開始当初の背景

(1) 背景

外国語学習を含むあらゆる学習場面において、学習者のやる気(動機づけ)の重要性は、繰り返し強調されてきている(e.g. Ellis, 1994; Dörnyei, 1994, 2001; 白井, 2004)。1980年代に Gardner らが提示した社会教育モデル(socio-educational model)は、長年にわたって外国語学習の動機づけ研究の核となった(e.g., Gardner, 1985; Lalonde & Gardner, 1984)。1990年代に入ってから教育心理学の諸理論に目が向けられるようになり、自己決定理論(self-determination theory: SDT)に基づいた外国語学習者の動機づけ研究が多く発表されるようになった(e.g., 林, 2011; 廣森, 2006; Noels, Pelletier, Clément, & Vallerand, 2000; Ootoshi & Heffernan, 2011; 田中 2013)。

SDTによると、人には生来「自律性」、「有能性」、「関係性」への心的欲求が備わっており、これらが満たされると内発的動機づけが高まるとされている(e.g., Deci & Ryan, 1985: 2000; 2002)。

自己決定理論 (self-determination theory: SDT)				
行動 (behavior)	最も非自己決定的 (nonself-determined)	←————→		最も自己決定的 (self-determined)
動機づけのタイプ (type of motivation)	無動機 (amotivation)	外発的動機づけ (external motivation)		内発的動機づけ (intrinsic motivation)
調節段階 (type of regulation)	調整なし (non-regulation)	外的調整 (external regulation)	取り入れの調整 (introjected regulation)	同一視的調整 (identified regulation)
認知された因果性の所在 (perceived locus of causality)	非自的 (impersonal)	外的 (external)		内的 (internal)

自己決定の段階 (Deci & Ryan, 2000: 2002より一部改訂) (日本語訳は廣森 (2006), 上瀬 (2004), 八島 (2004) を参考)

しかしながら、上記心的欲求のうち「自律性」への欲求が「生得的に備わっている」という仮定は西洋的発想だとして疑問視する声がある。例えば、アングロサクソン系アメリカ人小学生とアジア系アメリカ人小学生を対象とした Iyengar and Lepper (1999) の研究で、アングロサクソン系の子どもは、学習の内容を自分で選択した時に最も内発的動機づけが高まったが、アジア系の子どもは、信頼できる権威を持った他者(母親)が学習内容を選択した時のほうが、内発的動機づけが高かったことが示された。Spratt, Humphrey and Chan (2002) は、授業外自律学習に取り組む中国人大学生508人に質問紙と面接による調査を行い、彼らの自律の度合いと動機づけの関連を探った。その結果、彼らに自律的に行動する機会を与えることで動機が高まるのではなく、高い動機づけによって自律性が出現している可能性が示された。

日本では、伊藤 (2004) が都内の国立大学の学生に対し、勉強やスポーツといった達成行動について「自分のため」「他人のため」という動機を持つ理由を自由記述式の質問

紙で調査した結果、他者志向的動機が達成行動を動機づける働きがあると示された。この理由として伊藤は、日本は欧米と違って自己の概念が曖昧であり、他者との関係によって規定されるものだからでないかとしている。心理学的な日米比較研究の第一人者である東も、動機づけの文化差を指摘している。彼は日米の意欲構造の違いを「受容的勤勉性」対「自主指向性」だとし、日本人にとって「他人のため」という達成目標は積極的価値があり、日本人の動機づけの一要因になっていると主張する(東, 1994)。

(2) 日本の EFL 環境における先行研究

日本の外国語(英語)学習環境で SDT の検証を試みた研究の中には、自律性が学習者の内発的動機づけに影響を及ぼさないという結果を得たものもある(Agawa, 2013; Ootoshi & Heffernan, 2011)。Agawa では、首都圏の私立大学に通う317名の英語学習者に質問紙調査を実施し、彼らの動機づけに大きく貢献しているのは有能性と関係性への欲求充足だとの結果を得た一方で、自律性については、内発的動機づけに対するプラスの影響が認められなかった。すなわち日本の大学生は、英語の授業で自由裁量を与えられても、英語学習への内発的動機づけが高まることはないとの結果を得たのである。このことから Agawa は、アジア文化圏と SDT が構築された文化圏では、自律性に対する捉え方が異なる可能性があるとした。

SDT が日本の EFL 環境に応用できるかを検討する際、構造方程式モデリング (Structural Equation Modeling: SEM) を用いて SDT に日本の英語学習者の動機づけに関するデータを当てはめて検討する方法がある。この手法をとった先行研究が幾つか発表されているが、その適合度は決して良くないか(e.g., 廣森, 2006)、モデルの修正の必要性を示唆する結果(e.g., Agawa, 2013, in preparation; Ootoshi & Heffernan, 2011)となっている。

2. 研究の目的

研究開始当初の背景で述べたように、SDT を日本の EFL 環境に当てはめて考えるにあたって、幾つかの課題が存在することが示されていた。そこで、本研究では以下の2点を明らかにすることを目的とした:

a) Agawa (2013) の研究に質的アプローチによる検証を加えて、自律性への欲求と動機づけの関係の詳細を示し、日本の EFL 環境において SDT を量・質両面から検討する。

b) 日本の大学生英語学習者の動機づけ構造をよりよく説明できる SDT の修正モデルを提案する。

3. 研究の方法

本研究では当初、研究目的のセクションで述べた a), b) の目的を達成するために開始された。研究の進捗とともに研究デザインと目的を修正しながら、以下のような方法で行った：

i) 面接調査によって、SDT の 3 欲求と動機づけの関係を質的に調査した。参加者は、18 名の日本人大学生英語学習者とした。参加者の詳細を表 1 に示す。

表 1.
Participants' Characteristics and Their Codes

Motivation	Participant Code		
	University A	University B	University C
High	AH (m)	BH (m)	CH (f)
	AH (f)	BH (f)	CH (m)
Moderate	AM (m)	BM1 (m)	CM1 (f)
	AM (f)	BM2 (m)	CM2 (f)
Low	AL (m)	BL (m)	CL (m)
	AL (f)	BL (f)	CL (f)

Note: A = University A; B = University B; C = University C; H = highly motivated; M = moderately motivated; L = little motivated; m = male; f = female.

ii) 面接調査の結果をうけ、日本人大学生の英語学習者の動機づけを測定する質問紙を新たに開発し、その妥当性、信頼性の検証をおこなった。内容妥当性については英語教育の専門家と共同して検討をおこなった。構成概念妥当性と信頼性については、Confirmatory Factor Analysis (CFA)、内的一貫性の検討を用いた。さらに、ならびに SEM を用いて、SDT が日本の EFL 学習者の動機づけを説明できるかを検討した。

CFA と SEM のために質問紙に回答してもらった参加者の内訳は表 2 の通り。

表 2
Participants to the CFA Study

Level (Hensachi) of			
University	Department	N	
High (63-)	Economics	71	
	Literature	23	
	Medicine	57	
	Science and Engineering	104	
Middle (51-62)	Agriculture	41	
	Nursing	63	
	Sports Science	32	
Low (- 50)	Information Technology	41	
	Literature	12	
Total			444

Note. Hensachi = A scale that gives a measure of the difficulty for entering a university. It is an indicator that shows a university's position among others; the 50 of Hensachi means average; above 50 means higher than average; and below 50 means lower than average. Hensachi has been most commonly used for university ranking in Japan. The Hensachi values for this table were taken from Benesse® Manavision: <http://manabi.benesse.ne.jp/>.

iii) SDT にもとづいて教育的介入をデザインし、日本の大学の EFL クラスで実際に介入を行った。介入グループ (TG, 24 名)の他にコントラストグループ (CG, 23 名)を設け、これら 2 グループを比較した。

iv) 教育介入の効果を、ii) で開発した質問紙ならびに質的方法で測定し、その結果を ANOVA によって分析した。

4. 研究成果

i) 面接調査によって、以下のような結果が示された。

まず、英語を学習している日本の大学生の動機づけに有能性への欲求充足が大きく影響していることが再確認された。

関係性については、関係性への欲求充足でプラスに影響する場合と影響自体ない場合があることが示された。また、クラスメートだけでなく、教師との関係性の充足が重要であることが示された。

自律性への欲求充足に関しては、プラス、マイナス、どちらでもない学習者がみられ、一貫した傾向はみられなかった。さらに、調査で得られたデータを精査したところ、「自律性への欲求が満たされる」とは、choice を与えられることとは限らないことが明らかになった。

これらの結果をふまえ、日本人大学生 EFL 学習者の動機づけを測定する質問紙を、新たに開発する必要があるとの結論にいたった。

ii) 質問紙開発は Dörnyei, Z. (2003)にもとづいて、構成要素の定義確認、項目プール、項目の絞り込み、英語教育専門家との共同した内容妥当性の確認、予備調査、本調査の手順で行った。このようにして開発された質問紙は、さらに細かい修正を加えたのち、CFA、信頼係数 α の算出によって、質問紙の妥当性、信頼性を示すことができたとともに、SEM によって、SDT が日本の EFL 環境に応用できることを示すことができた。

iii) SDT にもとづいて教育的介入をデザインした。EFL 環境において自律性、有能性、関係性への欲求が充足されるよう、協同的学習を用いる(Crandall, 1999; Johnson, Johnson, & Taylor, 1993; Nichols & Miller, 1994)、タスクやアクティビティを行う理由やその価値を説明する(Reeve, 1996; Reeve & Jang, 2006)、振り返りシートやポートフォリオを使用する(Murphey & Jacobs, 2000)などの工夫をおこなった。

iv) iii)でデザインした教育介入は 9 カ月間に渡って TG 24 名の EFL クラスに使用され、教育介入前後における英語学習動機づけの変化を測定するとともに、CG 23 名との比較もおこなった。

その結果、TG においては自律性、有能性、関係性への欲求充足が進むと共に、自己決定の高い動機づけが高まったところを示された。一方、CG については欲求充足ならびに動機づけについて、有意な変化がみられなかった。

参考文献

- Agawa, T. (2013). Validating Self-Determination Theory in a Japanese EFL Context: Relationship between Innate Needs and Motivation. Paper presented at Fifth International Language learning Conference 2013. Penang, Malaysia.
- 東洋 (1994). 『日本人のしつけと教育 - 発達の日米比較にもとづいて - 』 東京：東京大学出版会
- Crandall, J. (1999). Cooperative language learning and affective factors. In J. Arnold (Ed.), *Affect in language learning* (pp. 226-245). Cambridge: Cambridge University Press.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum Press.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The "what" and "why" of goal pursuits: Human needs and the self-determination behavior. *Psychological Inquiry, 11*, 227-268.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2002). *Handbook of self-determination research*. NY: The University of Rochester Press.
- Dörnyei, Z. (1994). Motivation and motivating in the foreign language classroom. *The Modern Language Journal, 78*, 273-284.
- Dörnyei, Z. (2001). *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dörnyei, Z. (2003). Questionnaires in second language research: Construction, administration, and processing. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Ellis, R. (1994). *The study of second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Gardner, R. C. (1985). *Social psychology and second language learning: The role of attitudes and motivation*. London: Edward Arnold Publishers.
- 林日出男 (2011). 『動機づけ視点で見る日本人の英語学習 - 内発的・外発的動機づけを軸に - 』 東京：金星堂
- 廣森友人 (2006). 『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』 東京：多賀出版
- 伊藤忠弘 (2004). 達成行動における「他者志向的動機」の役割 『帝京大学 心理学紀要』, 8, 63-89.
- Iyengar, S. S., & Lepper, M. R. (1999). Rethinking the value of choice: A cultural perspective on intrinsic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology, 76*, 349-366.
- Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Taylor, B. (1993). Impact of cooperative and individualistic learning on high-ability students' achievement, self-esteem, and social acceptance. *The Journal of Social Psychology, 133*, 839-844. doi:10.1080/00224545.1993.9713946
- Lalonde, R. N., & Gardner, R. C. (1984). Investigating a causal model of second language acquisition: Where does personality fit? *Canadian Journal of Behavioural Science, 15*, 224-237.
- Murphey, T., & Jacobs, G. M. (2000). Encouraging critical collaborative autonomy. *JALT Journal, 22*, 228-244.
- Nichols, J. D., & Miller, R. B. (1994). Cooperative learning and student motivation. *Contemporary Educational Psychology, 19*, 167-178. doi:10.1006/ceps.1994.1015
- Noels, K., Pelletier, L. G., Clément, R., & Vallerand, R. J. (2000). Why are you learning a second language? Motivational orientations and self-determination theory. *Language Learning, 50*, 57-85.
- Otoshi, J. & Heffernan, N. (2011). An analysis of a hypothesized model of EFL students' motivation based on self-determination theory. *The Asian EFL Journal Quarterly, 13*, 66-86.
- Reeve, J. (1996). *Motivating others: Nurturing inner motivational resources*. Needham Heights, MA: Allyn & Bacon.
- Reeve, J., & Jang, H. (2006). What teachers say and do to support students' autonomy during a learning activity. *Journal of Educational Psychology, 98*, 209-218.
- 白井恭弘 (2004). 『外国語学習に成功する人、しない人—第二言語習得論への招待—』 東京：岩波書店。
- Spratt, M. Humphrey, G., & Chan, V. (2002). Autonomy and motivation: Which comes first? *Language Teaching Research, 6*, 245-266.
- 上淵寿 (編) (2004). 『動機づけ研究の最前線』 京都：北大路書房
- 八島智子 (2004). 『外国語コミュニケーションの情意と動機—研究と教育の視点—』 大阪：関西大学出版部
5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)
- 〔雑誌論文〕(計6件)
Agawa, T., & Takeuchi, O. (2016).

Validating self-determination theory in the Japanese EFL context: The relationship between innate needs and motivation. The Asian EFL Journal Quarterly, 18, 7-33.

Agawa, T. & Takeuchi, O. (2016). Re-examination of psychological needs and L2 motivation of Japanese EFL learners: An interview study. The Asian EFL Journal Professional Teaching Articles. 89, 74-98.

Agawa, T. & Takeuchi, O. (2016). A new questionnaire to assess Japanese EFL learners' motivation: Development and validation. ARELE (Annual Review of English Language Education of Japan). 27, 1-16.

Agawa, T. & Takeuchi, O. (2017). Examining the validation of a newly developed motivation questionnaire: Applying self-determination theory in the Japanese university EFL context. The Japan Association of College English Teachers (JACET) Journal, 61, 1-21.

Agawa, T. & Takeuchi, O. (2017). Pedagogical Intervention to Enhance Self-determined Forms of L2 Motivation: Applying Self-determination Theory in the Japanese University EFL Context. Language Education & Technology, 54, 135-166.

阿川敏恵.(2018). 言葉の力—教師による励ましとフィードバックは英語学習者の動機づけを高められるか—. 清泉文苑, 35, 49-58.

〔学会発表〕(計 8 件)

Agawa, Toshie. Verifying Self-Determination Theory in a Japanese EFL Context: Psychological Needs Fulfillment and L2 Motivation. AILA World Congress 2014, Brisbane, Australia. August, 2014.

阿川敏恵. 自己決定理論を越えて - 日本の大学生外国語学習者の動機づけ要因をさぐる面接調査 - 関東甲信越英語教育学会第 38 回 千葉研究大会. 於 明海大学. 2014 年 8 月.

Agawa, Toshie. Self-determination theory in a Japanese EFL context: Reconsideration of autonomy support. 11th Asian EFL Journal International TESOL Conference. Pampanga, Philippines. November, 2014.

阿川敏恵・竹内理. 日本人大学生英語学習者の動機づけ質問紙改良の試み. LET 第 55 回全国研究大会. 於 千里ライフサイエンスセンター. 2015 年 8 月.

Agawa, Toshie. Validating a New Motivation Questionnaire: Applying Self-Determination Theory in the Japanese EFL Context. The IAFOR International Conference on Language Learning 2016. Hawaii, U.S.A . January, 2016.

Agawa, Toshie. Pedagogical intervention to enhance self-determined forms of L2 motivation: Applying self-determination theory in the Japanese EFL context. JACET 55th International Convention. 於北星学園大学. 2016 年 9 月.

西田 理恵子・阿川 敏恵・小島 直子・廣森 友人.(2018). 日本人英語学習者における動機付けと情意に関する縦断的变化に関する実証研究. 外国語教育メディア学会 57 回全国研究大会. 於 名古屋学院大学. 2017 年 8 月.

Agawa, T. Examination of relatedness needs in Japanese EFL classrooms and task motivation: An interview study. Psychology of Language Learning. Waseda University. June 2018.

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.seisen-u.ac.jp/department/undergraduate/global/professors/agawa.php>

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

阿川 敏恵 (AGAWA, Toshie)

清泉女子大学 言語教育研究所・准教授

研究者番号 : 90409805